多文化が進む地域のモデルケースとして

特定非営利活動法人　京都コリアン生活センターエルファ
理事長：鄭　禧淳　さん
事務局長：南　珣賢　さん

「自分の力を信じること・育てること・仲間を広げること」
それが力になります。想いがなかったら何もついてきません。
地域の人たちと一緒に、在日コリアンをはじめとする外国籍住民の事情などについて、学び合いたいです。（鄭さん）

特定非営利活動法人「京都コリアン生活センターエルファ（以下，エルファ）」は，在日コリアンをはじめとする外国籍住民や地域住民が，ありのままの自分を出せる環境をつくるために，高齢者支援事業，障がい者支援事業，多文化共生事業など，様々な取組を実施されています。

エルファは，自治会・町内会と連携して大きなイベントを実施するという形ではなく，日頃から地域との交流を通じて，時にはエルファが地域の行事を手伝ったり，時には地域の人がエルファのボランティアや寄附者・支援者として行事に関わったりしているという連携の形をとっています。その形を目指したというよりは，日々の近所付き合いを大切にしていった結果，そのような関係に行き着きました。

■“一世”の現状に使命感を感じて…■

エルファの前身は在日コリアンのための生活相談所。そこで様々な生活相談事業を実施していました。多かった相談が高齢者に関するものでした。今，“一世”と呼ばれる方々の多くは成人してから日本に来られたため，日本語や日本の文化等にあまり馴染みがありません。そんな中，年々生活の中に日本文化や生活様式が入れば入るほど，日本語と朝鮮語も両方わかるという人は家族の中でも少なくなっていき，孤立していったのも“一世”の人たちでした。

“一世”の方たちが，自分を守るために自分から壁を作ってしまう現状を目の当たりにし，そこに使命感を感じ，“一世”の方々をはじめとする在日コリアンや外国籍住民，地域住民が，一番自分らしくいられる場所を作る，これがエルファ設立の第一歩でした。

■地域との日常的な関わりから…■

地域との関わりについて，国籍や文化の違いなどから，すべてが最初からスムーズだったわけではないそうです。とはいえ，地域住民とうまくつながるために特別に工夫したということは無く，「『ここでやろう』と思ったのなら，地域の人に最大限理解していただく義務がある。」との思いから，国籍や文化の違いがあっても，一方的にでも良いので理解していただけるようエルファを知ってもらうための努力を続けました。

「地域との交流は途切れることなく続けることが大切」そういう想いから交流を続けていたら，いつしかあいさつを相互にできるようになり，信頼・つながりを構築することにつながりました。「地域のみなさんに理解してもらうのは時間がかかったけれど，この１０年間でかなり理解が進みました。」と嬉しそうに語られました。

高齢者の生活に関する実態調査を実施した時も，様々な機関と連携をしつつ民生委員等と一緒に高齢者のお宅を訪ねて回られました。コリアンの高齢者の方々は民生委員を行政の人と思っている人もいるようで，そこにエルファが入ることで民生委員と高齢者をつなぐ役目を担うことができたそうです。

地域との連携にかかる費用として，会費や寄附等が挙げられますが，エルファでは「ここで暮らす人間の当然の義務」と捉え，伝統的な行事を守っているという気持ちで積極的に会費や寄附をされています。

「交流の種をお互い蒔くという姿勢は崩してはいけない」という想いから，何かできることを常に探し，交流を続けてこられました。

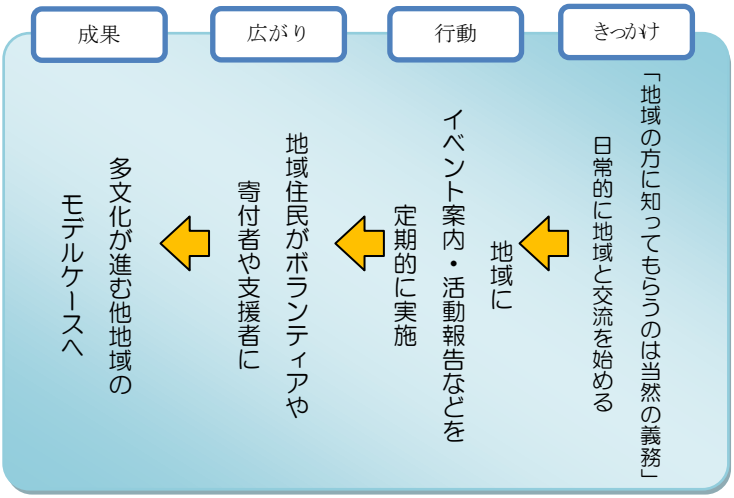
■印象的な地域での出来事■

地域との交流で印象に残っている出来事として，毎年開催している「エルファ祭」の事を挙げられました。地域等で祭の案内をしたところ，地域住民がたくさん参加してくださったそうで，利用者も大変喜んでいたそうです。

また，パーキンソン病の方の介助をしていた時のことを挙げられました。自動車に移乗する時がとても大変で，いつも大人が４，５人で額に汗して車の乗り降りをサポートされていたそうです。その様子を見ていた地域のある方が

翌日，「口座に振り込んでおきました。そのお金で，車いすでもそのまま乗せられる専用の車を買ってください」と高額の寄附をしてくださったそうです。「その時は感動で泣きました。お金を頂けたことにではなく，その方が本当に利用者の立場に立って見てくださっていたんだなと…」そう目頭を熱くされて語ってくださいました。

■多文化が進む地域のモデルケースとして…■

「地域全体で，在日コリアンをはじめとする外国籍住民が抱える事情について，お互い学び合う気持ちを大切にしていきたい」と南さんは語ります。多文化が進むにつれて，様々な地域で多様な背景を持っている方々が増えています。エルファがこれまで培ってきた地域での取組は，今後様々な地域にとってモデルケースとなるでしょう。

お互いが支え合い生きていくのが地域です。国籍や民族は違っても，住んでいるところは一緒。排他的になるのではなく，先入観を捨てて，失敗を恐れず，どんなことからも学び合うことができる地域を目指して，あらゆる出会いをチャンスに変えていく気持ちを持ち続けることが大切です。